

「揖保川を語り生かす集い」結果概要

「揖保川を語り、生かす集い」網干会場 結果概要

日 時：平成15年5月11日(日) 14:00～16:30

場 所：姫路市 網干市民センター 大ホール

参加者：委員9名、発表者5名、河川管理者15名、一般参加者67名

1. 開会

開会挨拶 藤田委員長

2. 揖保川流域委員会について

「河川整備計画について」 国土交通省姫路河川国道事務所 那須所長

「揖保川流域委員会の活動状況について」 藤田委員長

3. 住民からの意見発表

河盛史郎氏(姫路市、明日を語る西姫路住民懇談会)

- ・今年3月に京都で開催された「第3回世界水フォーラム」においても、貴重な水資源をいかに大切にするか、いかに水を汚さないでおくかといったことが強調され、我が国では、水問題を総合的に解決するため、各省庁間の垣根を取り払う水基本法の制定が求められている。揖保川の問題を考えると、どうしても各省庁の関係する問題、国・県・自治体の調整が必要な問題が多くあり、河川整備計画の策定にあたっては、単に国土交通省所管の領域だけの問題に限るのではなく、総合的な検討をお願いしたい。
- ・流域下水道の問題について、水量が減ること、処理水の水質がよくないことの2つが、どこの地域でも問題になっているということを知ったが、やはり揖保川においても流域下水道が進むにつれて、この2つの問題が出てきているのではないかと実感している。揖保川で採用している活性汚泥法は、工場排水が混ざる流域下水道の場合、不適当な処理方式であると思う。また、活性汚泥法で出てくる余剰汚泥は焼却処分されているが、これが原因で近隣では悪臭の苦情が絶えない。そういう点を含めて考えると、流域下水道ではなく、個々の地域でその水に適した方式で処理し、処理した水を川に戻し、窒素やリンなどの余分なものは川の自然の作用で浄化する方式が妥当と考えている。
- ・揖保川からの工業用水の契約水量は、新日鐵の高炉休止という生産量の大きな縮小があったにもかかわらず、ほとんど変わっていない。現在は、排水規制が濃度規制となっているが、絶対値の規制を加味して契約使用水の値段を改定することによって、もっと工業用水の無駄遣いを省くことができると思う。
- ・数年前から浜田地区の畑、揖保川の中州の畑から塩分が出はじめたということを知り、農家の人から聞いている。揖保川の河川改修で川底をコンクリートで固めるという工事をした時期から塩分が出はじめたということなので、伏流水と表流水の水位の問題を絡めて、その原因を解明していただきたい。
- ・揖保川の河口部は、昔はたくさんの貝がとれる優れた漁場であった。しかし、一時汚染された水質が回復してからも、稚貝、稚エビを放流してもなかなか育たないということを知り、漁師さんが話している。その影響として、現在の流域下水道の水処理の問題に原因があると考えている。

小野広治氏(姫路市)

- ・川はやはり美しく流れてこそ揖保川だと思う。河口付近たくさんあるヨシは、小魚のすみかとなり水の浄化作用もあるので、その保護は大事であると思う。

- ・堤防の強度あるいは幅の問題もあるが、松並木や桜並木など揖保川の堤防沿いに植樹をしていただきたい。また、下流部の河川敷に散策道や広いスペースを確保していただき、ところによっては人々の目を楽しませるような草花を植えたりしてもらいたい。
- ・揖保川下流部の興浜地区で火災が起きたときに、目の前に川がありながら消防車が下りられなく、水利に困った経験がある。消火栓だけに頼るのではなく、河川敷に消防車が下りられるようにして、水利を確保できれば被害は少なくすることができるのではないかと。
- ・現在、河川の工事で橋の架け替えをしている場所があり、仮設道路が設置されているが、通学路もある関係で非常に危険と感じている。橋の架け替えがすむまでには、まだ日数がかかると思うので子どもたちのための安全策はないものかと思っている。

瀧本則夫氏(姫路市)

- ・下流部では、現在も国が震災対策工事などを実施しているが、住民にとっては工事の目的や効果がわからない。河口域がどのように変化するのか、例えばそれをコンピュータグラフィックや図面等で知らせていただき、その目的や将来像がわかるようにしていただきたい。
- ・揖保川堤防の道路は、通勤時間帯に非常に渋滞するところが何カ所がある。一般家庭の生活道路に車が入ってくるといふこともあり、交通事故も心配される。河川改修の際は、堤防の道路を2車線化し、通勤の自動車に供用されるような計画をお願いしたい。
- ・河川敷等に、桜並木があつたり、遊歩道があつたり、ベンチがあつたり、川の中に入れてたりするような施設があつたりすれば、住民の方も川を憩いの場として利用できると思う。

大脇和代氏(姫路市、姫路市議会議員)

- ・これまで揖保川に公共事業としてどれぐらいの予算が使われてきたかということをお教えいただきたい。
- ・住民の中にはいろいろなことを深く考えていらっしゃる方おられるが、なかなか意見が言いにくいというところもあり、今回の集会よりも、もう少し小さい範囲で、流域の村々でも意見を聞けるようにしていただきたい。
- ・揖保川に高瀬舟が行き来していた時代のことなど知らない方も多いため、そういう揖保川の歴史、文化、そこでかかわってきた暮らしなどがわかり、そこに行けば、意見も述べられるという場所があればいいと思う。例えば、網干の余子浜にあり、江戸時代の「蔵元」で廻船業も営んだ加藤家が、今は空き家になっているが、お金をかけて新しく何かをつくるのではなく、今ある施設を存分に利用して何か（高瀬舟資料館とか）できるのではないかと。
- ・余部に桜づつみができているが、網干の河口にも、桜の下で揖保川に触れる場が求められている。いろいろなハードルがあると思うが、情報の公開をもっと進めていただければ、住民の皆さんはいろいろなアイデアや意見を持っているということを感じている。

圓尾哲也氏(姫路市、西播愛鳥会)

- ・揖保川の下流域は、冬季にカモの渡来地となっており、特に林田川との合流点から下流は特筆すべき渡来地と言える。ここに、コハクチョウ、オオハクチョウ、ヒシクイ、ツクシガモなど大型の野鳥がやってくるということは、彼らにとって安心してとどまることのできる環境があるからであり、林田川合流点から下流の区間は、できるだけ現状の自然を残した状態の整備をしていただければと考えている。
- ・その他にも揖保川には多くの野鳥が見られる（ハクセキレイ、ノスリ、アオサギ、コサギ、キジ、コミミズク、タゲリ、ユリカモメ、カンムリカイツブリ、コガモ、ホシハジロ、カワウ、カワセミ、コチドリ、ハマシギ、チュウシャクシなどの紹介がスライドを用いて紹介された）。これは、それだけ多様な自然が揖保川にあるからであり、自然観察会などの環境教育の場として有効に利用していけばと考えている。

意見発表後、参加者より次の発言がありました。

理美容業界、クリーニング業界の排水からは化学物質が排出されている。一般家庭から化学物質を出さなくてもいい方法があるので、行政から一般の方への教育を徹底していただきたい。合成洗剤を使わず、石けんを作り、使っていただくための活動を行っているが、子どもたちに本当にいい水が残してやれるのだろうか、というのが今も続いているメッセージである。一人一人の生活者が賢い消費者であるようにという言葉がよく言われるが、そうではなく、自覚ある消費者になっていただき、私たちは、有害化学物質をいっぱい家の中に取り込んで暮らしている、大変なリスクを受けて生活をしているということを認識していただきたい。また、揖保川のいろいろなところで、頻度をもっと増やして水質検査をしていただき、その変化などを調べていただくようお願いしたい。

消火栓は、その口がたくさんあっても、水圧の関係から1か所しか水をとることができない。火災の際、揖保川から直接水源がとれるよう、消防自動車が川に下りられるようにしていただきたい。

播洞川流域では短時間に激しい雨が降った場合に、水の逃げるところがなくなるので、内水排除対策をお願いしたい。また、子どもが学校へ行っているときにそのような雨が降った場合、どこへ待避させるのかということも検討していただきたい。

4 . 話題提供

「揖保川の舟運と網干地域の発展」 増田委員

「干潟の自然環境」 栃本委員

5 . 意見交換

参加者より次の発言がありました。

環境の変化からくる大水対策を川だけで引き受けることには無理があるのではないかと感じる。針葉樹になった山をブナ林に戻すとか、道路のアスファルト舗装の浸水とかの対策で、すべて川に負荷がかかるようなまちづくりのあり方を見直していかなくてはいけない。それから、姫路では消火対策が非常に大事になっており、公園とか校庭の下に大きな貯水池をつくるなど、雨水を中水として利用するようなまちづくり計画がもっと取り入れられていかなければいけない。

揖保川の井堰の上流には泥がたまり、自然の浄化作用がなくなっており、その川底をどう取り除くかが問題となる。また、川の中に藻が生えているのも良い状態とは言えない。河川工事の際は、自然浄化が行われるような川を考えてほしい。

網干水門ができる前は、大水のとき網干川の方へ水が流れるような自然の対策があったが、今はそこをせき止め、揖保川下流部で川幅を広げている。また、昔はハゼやエビがいた環境も今はなくなっている。大金をかけてなぜそんなことをしたのか、今でも不思議に思っている。

揖保川をいい川にするために、コンクリートブロックの護岸でなく、捨石の護岸にしてほしい。子どもが川へ行くときの危険も減らせるし、海にいる生物や川にいる生物が集まってくることもできるようになる。川は自然であってほしい。

揖保川ではできるだけ自然を大事にしてください、やむを得ず工事が必要なところは、こういう事業をしないと住民の暮らしが守れないのだということをきちんと情報公開して進める手法をとってほしい。また、行政と住民の取り組みにより水質は改善されたのだが、そこに住む生物が40年前、50年前からどのように変化してきたのかという具体的な調査結果を住民に教えてほしい。

6 . 閉会

「揖保川を語り、生かす集い」山崎会場 結果概要

日時：平成15年5月17日(土)(14:00~16:30)

場所：山崎町 山崎防災センター ホール

参加者：委員12名、発表者6名、河川管理者13名、一般参加者16名

1. 開会

開会挨拶 藤田委員長

2. 揖保川流域委員会について

「河川整備計画について」 国土交通省姫路河川国道事務所 那須所長

「揖保川流域委員会の活動状況について」 藤田委員長

3. 住民からの意見発表

幸福重信氏(波賀町)

- ・今、これだけ破壊された環境問題は、ただ川だけで論じることにはできない。森、川、そしてこれを利用する都市生活者、漁民、いわば森、川を利用する者が一体となってどういう環境をつくり上げていくかを考えていかなければならない。
- ・山は手入れが行き届かず、荒れて崩壊し、裸地以上の状態と言える。雨が降り、荒廃した森林の樹木と一緒に崩壊してきたら、非常に大きな災害につながる。河川改修においてこういうリスクを大きく見ざるをえないため、安全率を見すぎているのではないかと思う。
- ・自分の村では河川改修が進み、地域で一番の古木だったソメイヨシノが伐採され、子どもたちがクルミを拾っていたオニグルミやたくさんあったヤナギも1本もなくなった。(護岸の)階段は勾配が急で、お年寄りや川へ下りられない。県民、国民だれでもが川と親しむことができる川が国民に共通して愛される川だと思う。一方の事例として、八丈川では改修後8年しかたっていないが、工事で出た石を積み、川幅をきちんと作り、瀬があり、淵があり、木がある川となっている。水を流すことも必要だが、川の周囲の空間、河川空間というものをいかに考えるか、これが河川改修のこれから目指す方向だと思う。
- ・私は、この川を住民で守っていかなくてはならないと決意し、カワニナの養殖、ホタルの養殖に取り組み、またネコヤナギを植えたり、土手の草刈りをしたりして、川を守ってきた。
- ・河川改修で、水だけきれいに流す川になると、必ず河川改修したところは瀬ばかりになって、水裏がなくなるので淵ができない。淵があってはじめて大きな魚が育ち、アユのたまり場にもなっていくので、そういう川づくりを期待し、先生方と一緒に河川を考えていくべきである。
- ・波賀町では漁民の方に、木を植えてもらい漁民の森ができた。水を供給する山の人間、それを利用して恩恵を受ける里の人間、海の人間も含めて、三位一体となって環境を守り、向上させていかなければならない。

古賀弘一氏(太子町)

- ・分科会において揖保川を子どもたちの教育の場にしよう、学校教育の総合学習に取り込んでいこうという提案があったが、これに基本的に賛成である。揖保川という素晴らしい川に触れて、子どもたちに歴史や文化を知ってもらい、また、自然、環境ということも学んでもらいたい。
- ・子どもたちへの教育は、大人の押し付けがましい教育にならないよう気をつけなければならず、子どもたち自身が自ら発見し、学ぶことが大事である。大人たちは子どもたちが川と水に親しめる場だけをつくれればよく、最初だけ川とのつき合い方を誘導してあげればいいのではないかと

- 押しつけ教育は本当の意味で子どもたちの身につかず、子どもたちのためにならないと思う。
- ・原風景という言葉があるが、子どもたちが大人になったとき、揖保川が彼らにとっての原風景であってほしいと願う。原風景とは子どもたち自ら遊ぶ場所を見つけ、そこで自分たちが思いっきり遊んだ体験が原風景になっていくのだと思う。
 - ・人工的に整備された河川敷、公園、グラウンドが揖保川の個性では決してないはずである。ありのままの自然の姿が揖保川の個性ではないか。最低限の安全性を確保すれば自然のままでもよく、そこで子どもたちは自由に遊び、危険をも学び、水に触れ、風を感じ、花や草木をめで、いろいろな生物を発見する。そこから子どもたちが自ら得るものは多く、そうやって得たものはかけがえなく大きいと思う。
 - ・きれいに整備された河川敷の公園やグラウンドなどはいらぬ。揖保川に最もふさわしいデザインはありのままの自然景観であり、それが学ぶ主体である子どもたちにとって最も重要な揖保川の姿だと思う。人間はもっと自然に対して謙虚になり、開発に対しありのままの自然が少しでも長く残せる、後世に引き継げるということを念頭におく必要がある。

小林浩一氏(一宮町)

- ・釣り人としての意見を述べたい。河川工事は個人の財産などを守るために必要なことというのは理解できるが、工事で大きな石を川の両端に動かしてある。工事をするうえで邪魔になるのかもしれないが、元の位置に戻していただきたい。川は石に流れが当たり、水に変化があってはじめて魚が育つ環境ができる。小さい石ばかりになると魚が隠れるところなくなり、すむところなくなり、魚がいなくなってしまう。流れのないところにあるネコヤナギがなくなってしまうということも、大きな石がなくなってきたからということだと思う。
- ・次に、親としての意見を述べたい。子どものころ、夏休みになると毎日川へ行き、水中眼鏡で潜り、魚を取っていた。大きな石と小さい石がかみあい、そこに空間ができ、手を入れると魚がいた。それを子どもに教えようと思っているが、最近はその石の間の空間が減っています。それから川に行っても下りるところがない。兩岸が完全にコンクリート護岸になってしまうと、川と親しもうにも下りられない。子どもと遊ぶというと、川で遊んだり山で遊んだりすることが一番多く、自分が遊んだところは大切にしたいし、自分の子どもや孫に伝えていきたいという気持ちが芽生えてくるのではないかと思う。親から学んだり自分が体験したことの方が、自然に対する態度に表れてくるのではないかと思う。
- ・火災の際、水を取るのに困るところがあり、河川改修のときには消防水利も考えていただきたい。

高井佳彦氏(山崎町、揖保川漁業協同組合)

- ・近年、水質もよくなり天然アユの遡上も見られるようになったが、井堰等がたくさんあって、上流まで遡上できていないというのが現状だと思う。各井堰の魚道は、遡上しにくい魚道がほとんどであり、魚道整備を含めた横断構造物、井堰等の統合および改良をしていただきたい。また、井堰の上流では土砂が堆積して大きな石が埋まり、魚の住む場所が少なくなり、河川環境が悪化している。土砂を撤去し、河川環境を改善していただきたい。
- ・昨年、下水道処理施設の排水口付近にアユをつけて観察をしたが、1日以内に全部の箇所であユが死んでしまった。近年は河床に水草等が異常繁殖することも多く、昨年のような雨の少ないときには現行の排水基準では河川環境に大きな影響があるのではないかと。水質および河床の土質調査などもしていただきたい。
- ・河川工事の際、工事業者さんと話をすることもあるが、ここはこんなふうにしてもらいたいということを言っても、その段階では何も言えない状況である。設計段階から地域住民の意見を幅広く取り入れてもらい、工事発注についてはコンペ方式を採用していただきたい。

田口五月氏(山崎町)

- ・山崎町矢原に中州があるが、昭和 51 年の災害のときに、たくさんの木材が流れてきて、中州の木に引っかかり、高いところの田んぼにまで水が入ってきたということがあった。自然を残していただく必要はあるが、大きな木は何とかしていただきたい。また、中州には、たくさんの動物が住んでおり、少し見直していただければ、川を子どもたちが渡り、そこで遊べるのではないかと思う。西側は浅くて歩きやすいとも思うので、そういう面から見直していただければ、アユの釣り場にもなっていくのではないかと思う。
- ・いろいろなところに道の駅があるが、揖保川のどこかに川の駅というのがあってもいいのではないかと思う。揖保川の下流に行くと揖保川町、龍野市、新宮町などで河川敷が整備され、娯楽・スポーツの場が面で整備されている。高齢者が散歩をし、話し合いができる場所なども必要ではないかと思う。
- ・昨年、高齢者の方が、川辺に下りるとき、草の上を歩いて滑り、けがをされた方がいる。川に入るところの整備を少し考えていただければと思う。

久宗丑男氏(山崎町)

- ・山崎町にある「山崎植物同好会」と「水生生物調査会」の活動について説明する。「山崎植物同好会」は、昭和 60 年頃、宍粟郡の 23 小学校の理科主任が集まって始めた活動で、自然に親しみ、自然を愛するという教育を子どもたちにしていくことを目的に、国有林や神社、原始林的なところの植物採取会などを行っている。現在は学校の教員以外にも会員が増え、150 あまりの会員で活動している。「水生生物調査会」は、昭和 63 年ごろから活動しており、山崎町の中学校 3 校と小学校 6 校が参加し、町内の 9 地点で、子どもたちと一緒に川の中の水生生物による水質調査を実施している。これらの活動において、川の水が美しくなっていくようにということを説明し、子どもたちからも喜んで参加してもらっている。
- ・以前は、家庭から出るいろいろなごみを河原に持っていき、捨てていた。しかし、10 年ほど前から、自治会組織が川の草刈りや、掃除を実施するようになり、それ以来、河原へごみを持って行って捨てるような人はなくなった。地域全体が川を美しくしようという意欲に燃え、今では河原へごみを捨てたりするような人はいなくなった。今は町民全体が川を美しくするために協力しているので、喜んでいる。

意見発表後、発表者への質疑応答が行われた。

(委員から発表者への質問)アユの観察をしたのはどの地区で行ったのか。

(回答)部落単位で処理している下水処理場の排水口付近で行った。

(委員から発表者への質問)「山崎植物同好会」「水生生物調査会」に参加した子どもさんは成人されていると思うが、その方たちが今どう感じておられ、取り組みの輪が広がっているといったことがあるのか。

(回答)学校の先生からは、子どもたちが川を愛するようになり、川に親しみを持つようになったということを聞くが、卒業生から直接そういうことを聞いたことはない。

(委員から発表者への質問)是非残したい揖保川の風景、自分の原風景となる場所、スポットについて教えていただきたい。

(回答)波賀町原地区の八丈川(幸福氏)。龍野橋から望む鶏籠山の風景(古賀氏)。揖保川の大きな石(小林氏)。山崎町十二波付近の揖保川(高井氏、田口氏)。伊沢川の水の美しい川(久宗氏)

4 . 意見交換

発表者、その他の参加者、委員を交えて意見交換が行われました。主な発言は以下のとおりです。
十二波のところで河川改修を予定していると聞いている。夏になると子どもたちが泳ぐ場所なので、川へ下りていきやすい河川改修をしてほしい。

(委員の発言)河川はできるだけ昔あった河川の状態にしておいてほしい、川へ遊びにいたり、釣りに行くとき両側が堤防で囲まれていて川に下りにくくなったという意見があった。一方で、堤防を整備することで洪水に対する安全度が上がったことは事実だと思う。こういう川であってほしいという希望はある反面、何かを得ようとするとか何かを失わなければいけないというところがある。やはりそこに住み、川を利用されている方が最終的に何を望むかという意思決定が河川整備に反映されるべきだと思う。

農業用の井堰は、50cm～1mの高さのコンクリート、または昔の形式の井堰があれば、水を取水できるのではないかと。川幅全体の水門をつくっているが、なぜ工事費、管理費のかかるものをつくらなければならないのか。

(委員から参加者全員への質問)

自分の家の屋根に降った雨を生活用水として使っている方はおられるか。また、家に降った雨はできるだけ地下に浸透するように工夫している方はおられるか。 拳手なし

上流部には、堤防がなく治水が進んでいない場所が多いが、洪水に対して不安を感じている方はおられるか。 2名拳手

6 . 閉会

「揖保川を語り、生かす集い」龍野会場 結果概要

日時：平成15年5月18日(日)(14:00~16:30)

場所：龍野市 龍野市青少年館 ホール

参加者：委員12名、発表者11名、河川管理者12名、一般参加者185名

1. 開会

開会挨拶 藤田委員長

2. 揖保川流域委員会について

「河川整備計画について」 国土交通省姫路河川国道事務所 那須所長

「揖保川流域委員会の活動状況について」 藤田委員長

3. 住民からの意見発表

伊沢 力氏(揖保川町)

- ・片島井堰は昭和40年の集中豪雨により流失し固定堰として復旧したが、その後も昭和51年、昭和52年と災害があり、その度に復旧のための改修を行っている。平成10年には片島用水樋門を改修し、さらに平成13年には、固定堰の上流側が深堀され、土嚢を埋め込むことにより応急処理しているが、堰の下流は深掘りされたままの状況である。堰全体が沈下するおそれがあり、川底の整備ならびに上流側の整備をお願いしたい。
- ・揖保川町正條地区に畳堤があるが、昭和51年、平成2年の洪水で水位が上昇し、堤防天端まで水位が上がり、道路を封鎖したこともある。この堤防付近は、道幅も狭く、特殊堤の改修をお願いしたい。
- ・揖保川町のJR鉄橋から馬路川排水機場のところまでの間に、河川敷を活用したサイクリングロード、釣り場等を含めた、水に親しめる護岸整備をお願いしたい。

伊藤充弘氏(龍野市、たつの夢くらぶ)

- ・毎年8月に行われる龍野市の花火の日に「揖保川ふれあい清流祭」を実施し、スポーツ団体など地元のいろいろな団体の方が参加されて模擬店を出している。この模擬店の前に「揖保川清流祈願祭」ということで、行政の方にも参加いただいて龍野神社の神主さんに来てもらって(河川敷で祭壇を組み)御祓いをし、清流が末永く続きますように、災害のないように、ということお祈りしている。揖保川の清流に感謝する気持ち、自然を一つの神様ととらえた意識、自然に対する感謝の気持ちが表れるようなまちづくり、人づくりができればと考えている。昔からある揖保川の自然に感謝の気持ちが持ち続けられるようなイベントや、仕掛けをしていただきたい。

井上良三氏(揖保川町)

- ・平成14年度から県道龍野龍野停車場線の野田橋から龍野新大橋までの間で道路改良工事が実施されている。山陽自動車道が揖保川を横断している高架付近の左岸には高水敷の整備がなされ、そのために、流水の方向が右岸の方に向かっている。洪水時には右岸の堤内地において漏水等も見られるような状況なので、住民としても心配している。道路の工事と関連して、この対策についても調査をしていただきたい。
- ・揖保川町には、河川敷にきらめきスポーツ公園が整備されており、この公園付近は道路がカーブしている。そのカーブのところの護岸に階段工を設置していただいているが、小、中、高校

生がサッカー等で利用するときには、その階段工は観覧席として利用されている。脱輪等により自動車が、河川敷の方へ落ちてくれば大変な事故になると思うので、防護柵を設置していただきたい。

川端英武氏(太子町)

- ・人間と川とはいろいろな面で、全体の「調和」が大切である。川の持つ機能、人間の要求する機能、あるいは自然界全体としての調和の一つの姿があるはずである。川には豊かな情操のきずながあった。そこには自然の部分が多分にあり、まさに川は生きた状態であった。「ゆく川の流れは絶えずして」という方丈記の冒頭文、唱歌の「春の小川」や「めだかの学校」に思いつく出される日本人的感性を育ててくれたのが川だった。川は人の体で言えば動脈のようなもので、海は心臓、太陽はその拍動源のようなものではないか。水に伴う一連の循環が自然として譲り合った環境を形成し、多くの生命を育てており、人間もそれに参加しているにすぎないということである。
- ・揖保川は、これまでの治山、治水、利水を中心に現在の状態を保全・管理しながら、さらに、中国山地の源流から瀬戸内の河口までに揖保川が失ったものを徹底的に調査し、それを復元する、あるいは補うべく、揖保川自然流水をつくってほしい。
- ・縦割り行政が邪魔になることもあるかと思うが、それら乗り越えて活動してもらえる組織をつくってほしい。

木村俊二郎氏(龍野市出身)

- ・揖保川には「畳堤」と「桜づつみ」がある。畳堤はラジオ番組でも取り上げ話題になっており、桜づつみ(龍野市)は第1期の桜づつみ事業として整備されたもので、日本でもこれだけりっぱなものはないと思えるほど自慢できるものである。しかし、その後揖保川は元気がなくなった。
- ・非常に悪い例が「水辺の楽校」である。昔、揖保川で遊んでいた時代に河川敷にグラウンドはなかったはずだが、サッカー場に芝が生えていない中途半端なグラウンドになっている。また、春の七草園、秋の七草園、タンポポ園などあるが、春の七草園はほとんど枯れてなくなり、秋の七草園には園芸品種のカワラナデシコが咲いており、タンポポ園はなくなっている。
- ・他の河川では、水と陸との移行帯、境目のところが問題になっており、そこを大切にしようという運動が起こっている。これは植物、魚等にとって非常に大切な場所だが、揖保川町の水辺の楽校ではその水陸移行帯が大変な状態になっている。
- ・揖保川を川らしい川にしていってほしい。川らしい川に必要なのが洪水で、出水があり、植物が攪乱を起こし、また新しい河原ができるという状態がなくなっている。揖保川の場合、水のコントロールはあまりしていないように思うが、攪乱をどうして起こすかということは重要な問題である。
- ・もう少し川ににぎわいを取り戻していただきたい。揖保川せせらぎ公園の向かいの中州には、野鳥が大変たくさん集まっている。ここはすばらしい場所で、この場所を何とかもう少し観察できるように、あるいは河原をつくるような状態にしていってほしい。
- ・河川敷はグラウンドにしないで、原っぱ、広っぱであるだけで十分だと思う。

鈴木敏盛氏(揖保川町)

- ・馬路川は揖保川の支流で、県の管理河川だが、河床勾配が非常に緩く、揖保川の河床も高いため、出水の際は内水による浸水のおそれがある。昭和51年の集中豪雨では住宅の床上、床下浸水や、道路、農地等の冠水による甚大な被害を被った。この対策として、計10トンの排水ポンプを設置していただいたが、最近では、市街化区域内の正條地区において、区画整理事業が完成し、マンション、アパートの建築が著しく進んだため、従来あった遊水池、田んぼ等が減少し、以前のような集中豪雨があれば、必ず床上浸水のおそれがあると懸念している。また、

国道2号以北の雨水排水がスムーズに行えるように幹線水路の整備を順次行っているのですが、以前のような豪雨があると、短時間のうちに排水機場周辺に雨水が押し寄せる可能性がある。当初計画は毎秒20トンの排水が必要ということだったが、今は10トンしかなく、できるだけ早く排水ポンプの増設をお願いしたい。

曾谷 實氏(揖保川町)

- ・栗栖川と揖保川の合流点に設置されている半田井堰は、昭和45年の台風により流失し、その後、固定堰を復旧し、現在に至っている。ここには用水樋門が堰の上流側と下流側に2門あるが、上流側の樋門は洪水時の閉鎖作業に管理用道路もなく非常に危険である。また、揖保川はこの用水側に向かって流れており、洪水時には水路が土砂で埋まってしまうような状態である。半田井堰周辺の未改修の堤防を早期に築堤され、それに併せて樋門の改修を実施していただきたい。

武内憲章氏(龍野市)

- ・市街地における引堤事業についての図面がチラシに載っていたが、いくら任意に作成したものであるとは言え、代替案が示されていないことは残念である。引堤事業の計画地に住んでいる人、あるいは事業をやらされる会社もあり、そういうところにいたずらに不安を与えるだけではないか。また、龍野にとっては宝物というべき堀邸とクスノキがあり、そういうものが失われるのは非常に残念に思う。何とか代替案を考えていただきたい。
- ・洪水時の水を流すために、川の断面積で流量を考えておられるが、一方で河川敷の整備をしている。国、県、市が連携をとり、ちぐはぐなことにならないように、いろいろな事業を進めていただきたいということを、提言の中に盛り込んでいただき、安全のため、または河川、自然に親しめるような、今後20年～30年先の揖保川のビジョンをつくってほしい。
- ・今後20年～30年先の揖保川のビジョンを考えると何を優先させるのか。100年に一度の大水のときを考えて、安全を第一ということで考えるならば、河川敷やいろいろな施設を放棄してでも安全を考えないといけないかもしれないが、むしろ災害時よりも通常の時を大事にするというのであれば、グラウンドや河川敷の整備をして、もっと川と親しむようなかたちで事業を進めていただきたい。
- ・環境問題において、自然ということがよく問題にされるが、自然というのはあくまでも人に対しての自然ということなので、自然との調和をとりながら今後の事業をしていただきたい。

武内 智氏(揖保川町)

- ・揖保川では河川工事によって川が泥で埋まっている。これまで国土交通省も河床を触られたことがないと思うが、そういったことができるのか、できないのか。できないなら、なぜできないのかという答えを出していただきたい。
- ・揖保川はきれいな水が流れていると確信を持っている。都市部で飲む水と揖保川の水とは大きな違いがあると思われる。こういうきれいな川を維持していくために、国土交通省のお力をいただき、地域住民を含めて川を守っていかなくてはいけない。
- ・中州に流木が根づき、川の流れを妨げている。景観等にも配慮してこれらの除去ができないか考えていただきたい。

西本謙一氏(揖保川町)

- ・揖保川町の宝記井堰は、昭和32年に新しく設置してから長い期間が経っており、今後の揖保川改修の計画に併せて、ぜひ井堰の改修をお願いしたい。宝記井堰は揖保川の水が増水すると堰が自動的に倒れるようになっており、それが起き上がり、水田に水が引けるようになるまでに1週間から10日ほどかかる。洪水防御のために川幅は広げられないが、河床を下げる計画

があると聞いたが工事される様子はない。河川改修時に是非新しい堰をお願いしたい。

橋本梅子氏(龍野市、もりのたまご館)

- ・揖保川では、流域全体を考えた河川工事ができればと思う。その工事は部分的にするのではなく、揖保川の観光コースが生まれるべく改修され、しかもそれが住民参加によって行われればよい。その手段として、工事後に生まれる景観のシミュレーションを利用し、その映像を見ながら住民に提案していただき、みんなでつくる揖保川の観光ルートができればと願っている。(橋本氏の発表は景観シミュレーションの映像の例をスクリーンに映写しながら行われた。)

松原正行氏(龍野市)

- ・東甯崎井堰は、堰の上流に中州があり、中州の先端から東の方へ固定堰をつくっている。昭和45年の台風後に改修し、30年余り経過しているが、井堰本体はその後の出水などで形状が不整形になっている。これを改良しなくてはならないと同時に、最近になって中州が浸食され始めているということがわかった。この原因を調べたところ、堰の上流の河川敷にグラウンドが造成され、水の流れが変わり、それによって中州の浸食が始まったということなので、これに対しては国の方で工事をお願いしたい。
- ・堰のところにある屏風岩の上から見える中州とその西の方の山並みは見事な風景で、我々はこの風景を次の代に伝承していく義務があると思。そういった観点からも、この中州は今のうちに元の状態に戻していただければと要望する。

4. 意見交換

発表者とその他の参加者、委員を交えて意見交換が行われました。主な発言は以下のとおりです。

現在、揖保川の流域下水道は宍粟郡、揖保郡、龍野市を含め70%前後が完成している。下水道が完成するとどの程度水が減水するのかをお聞きしたい。

中州に公園が整備されているが、洪水時には水に洗われ、管理の不行き届きな公園となっている。経費の問題で放置されていると思うが、むだな費用が費やされているのではないかと思う。また、揖保川では清流が回復したが、林田川の汚水はまだ問題点が残っており、考えいただきたい。

揖保川には栗栖川、林田川などの支流が流れ込み大きな揖保川になっている。揖保川を考える場合、その支流の水源地の山のことも十分考えていただきたい。また、林田川は、安富ダムというのができてから、水を使う場合の調節をうまくしていただけて助かっている。支流に小さなダムでよいので、ダムをつくってほしい。

西播磨県民局が主催する「森・川・海のフォーラム」の中で、川の水をきれいにするためには森林が大切で、それにより生物が変わる、海岸部でカキ養殖にとってもプランクトンが出てきていい生産ができるといった話があった。流域委員会とこのような県の取り組みと密度の濃い連携をしていただき、上流から河口までのことを考えていただきたい。

(委員から発表者への質問)揖保川を活用した観光振興とは、従来の観光か、それとも何か新しい意味で提案しているのか。

(回答)下流から上流までをもう一度見直して河川改修し、いろいろなものを連携して観光ルートをつくる。例えば、揖保川を上がってみようというような観光ルートができればよい。

(委員から発表者への質問)長期間を見据えた安全を第一とするか、それとも通常の価値を重視していくのかということに関して、ご意見を伺いたい。

(回答)100年に1度の洪水ということだけでなく、20～30年に1度のスパンでよいと思う。それを選択するのは我々市民であり、それで災害があったときは我々自身の責任になる。

日飼の掘邸の西にあるグラウンド(祇園公園)は洪水を流す断面積を小さくしているので、撤去すべきである。また、鯉崎の上流のグラウンド(新宮リバーパーク)も同様に撤去すべきである。

市街地における引堤事業の図面で、龍野市中心部の東側に赤線、青線が描かれているが、どういう根拠か説明してほしい。

(委員による回答)今委員会で検討している河川整備計画の前の計画(工事实施基本計画)で、どれぐらい川幅をひろげれば洪水を処理する上で安全かを示した案である。それが妥当かどうかを今検討しており、検討材料として考えてもらった図である。

岩浦井堰のあたりは、昔は深さが2メートル以上あり、プールのない時代はそこで水泳をし、楽しく過ごした。今は、かなり川底が浅くなっており、河床を深くするとか、グラウンドを撤去するとかの方法をとっていただきたい。

掘邸のところのクスノキがない時代には、やぶで洪水から耐えてきており、そのやぶを外したら一抱え以上の石がぎっしり詰めてあったということである。また、祇園橋が最初に架けられたときは西橋と東橋とがあり、川は西側も流れていた。その西側のところにグラウンドをつくることは自然に反しており、河床をもっと下げること考えるべきである。

昔は、揖保川もきれいな水が流れていたが、山の木を伐採し、ヒノキやケヤキに木の種類が変わってからいい水が出てこなくなった。今から100年ほどかけて、なんとかしていい水が流れ、またいかなだ流れ、龍野橋のところ舟を浮かべてというような時代にしてもらいたい。

(委員から発表者への質問)豊堤への思いをお聞きしたい。

(回答)引堤により豊堤のある左岸側の景観が変わると、豊堤のできた原点のようなものがなくなってしまうので、そのあたりの改修は今後検討していくうえで、考えていかなければならない。また、豊堤については亡くなられた柳沢忠さんの資料が残っていると思う。この周辺の地域は、旭橋の付け替え運動で住民の方が活動された記録も残っており、非常に川に近い暮らしをされていたのではないかと。それがだんだんと川に近い暮らしがなくなり、今の現状になり、川の中にグラウンドができてしまった。本来の川の姿をもう一度考えていただき、川らしい川をつくっていただきたい。

今、他の河川では上下流交流会とか流域のネットワークというのができつつあり、揖保川にもそういう流域のネットワークをつくってはどうか。防災ステーションという施設があるので、それを利用して活動のすべれば非常におもしろいことができるのではないかと。また、中州(龍野大橋付近)は、バードウォッチングなど自然観察の場としては非常に良いのではないかと。場合によっては京阪神から来られる方もいるのではないかと。

水を治めることなどとてもない、人間の英知を超えた大自然に従わなければならない。今の生活は、これまで恩恵を受けてき揖保川に負荷をかけすぎていると思われる。これからは今の生活水準を少し切り下げて、取り組んでいくべきである。人間は、あまりにも便利さに慣れ、浮かれすぎており、ここで大いに反省して謙虚になって取り組む。こういう前提で議論していただければ、子や孫の世代に喜んでもらえる揖保川流域ができるのではないかと。

5 . 閉会